コンサートシリーズ「名古屋オルガンの秋」はカトリック五反城教会のパイプオルガンが修復されたこと、そして、カトリック五反城教会を創立した神言修道会の来日100周年を記念して2007年に始められ、今年で17年目、開催18回目を迎えます。今までこの「名古屋オルガンの秋」を通して本当にたくさんの出会いとご縁を頂きました。今までご支援下さいましたみなさまに 厚く御礼を申し上げます。これからも、パイプオルガンの楽しさと祈りの音楽による心の響きと幸せを名古屋より発信し、調和・ハーモニーをお届けして参りたいと思っています。

カトリック五反城教会には1978年にドイツ・ケルン市のペーター社によって建築された30ストップの楽器が設置されています。（78年当時は27ストップ、後に3ストップ追加。）音色は70年代に建築されたオルガンの典型的な配合がされていますが、その中には、E. K. レスラーというオルガン学学者がペーター社の創立者であるヴィリ・ペーターと共同で開発した非常に珍しいパイプも数種類含まれています。

又、整音はK.ヒールヒェンバッハという希代の名整音士の手によって仕上げられており、日本にあるパイプオルガンの中でも歴史的な価値の非常に高い楽器だと言えるでしょう。

そもそもペーター社はヴィルヘルム・ザウアーというドイツ・ロマン派を代表するオルガン建築家の製作所の支社として設立されました。ザウアーの代表作としては、ライプツィヒの聖トーマス教会、ベルリン大聖堂などのパイプオルガンが挙げられます。これらの世界的・歴史的にも非常に重要な楽器製作者の「孫楽器」が、カトリック五反城教会には設置されているのです。

当時の五反城教会司祭であったドイツ出身の神言会司祭ヨゼフ・トナイク神父はオルガンが設置された1978年に「名古屋オルガン友の会」を創立しました。以来、2001年に解散されるまで名古屋オルガン友の会は数多くのコンサートやコンサートシリーズを開催し、名古屋のオルガン文化の重要な担い手として活発な活動を続けていました。その頃は中部地方でも希少なパイプオルガンのうちの一台あったこの楽器を使用し、M.-Cl. アラン、W. ヤーコブ等、世界中から来日した名オルガニスト達がこぞってコンサートを行っています。

名古屋オルガンの秋実行委員会ではこの伝統を受け継ぎ、名古屋を中心に多面的なパイプオルガンの楽しさ、素晴らしさ、教会音楽の心を継続的に伝えていけるように活動をしたく考え、「名古屋オルガンの秋」を催します。

2024年度のプログラムは、教会音楽の礎である聖歌に視点を当てます。11月には美しい日本語で私たちの祈りを歌う髙田三郎作曲の典礼聖歌、そして12月には長崎の日本二十六聖人記念館に所蔵されているグレゴリオ聖歌の手稿より、教会が11月30日に記念する聖アンデレ使徒の日に歌われる聖歌を中心に据えます。この手稿はスペイン・アヴィラで15世紀に作成されました。その後カトリック教会の典礼改革の為に16世紀以降は使われなくなっていたものが、日本二十六聖人記念館の創立者・初代館長であったイエズス会司祭結城了悟神父によって同記念館に収蔵されたものです。現在では世界中の教会でもほぼ歌われなくなったグレゴリオ聖歌のレパートリーも多く含まれています。また日本ではこれまでに、この聖歌集より僅か1曲の聖歌が長崎で演奏された限りです。今回はこの手稿を読み解き、4世紀半の間眠っていた祈りの旋律をバッハのオルガン曲と共に、教会の「午後の祈り」の形でお聴き頂きたいと思います。

なるべく多くの方に教会音楽の心とパイプオルガンという楽器の魅力に触れて頂きたいという方針から、基本的に入場料は設定していませんが、今後の継続的な活動が可能となるよう皆様のご寄金のご協力を心よりお願いいたします。

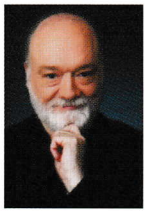
## 演奏者

**大森マイヤー・ユリカ　Yurika Omori-Meyer　ソプラノ (11月3日)**

作曲家髙田三郎とピアニスト髙田留奈子の一人娘であるピアニスト髙田江里と、作曲家トーマス・マイヤー＝フィービッヒの長女として、ドイツ連邦共和国ノルトライン＝ヴェストファーレン州に生まれ、幼少期に家族で日本に移住し現在に至る。雙葉高等学校卒業。東京音楽大学音楽学部音楽学科声楽専攻卒業。故・東敦子、石原良子、照屋江美子、稲垣俊也の各氏に師事。リラの会コンサートに出演。
これまでに、髙田三郎作曲「啄木短歌集」、モーツァルト作曲「Exsultate Jubilate」、ベッリーニ作曲　オペラ「夢遊病の女」より"Ah ! non credea mirarti"、サンティアーゴ作曲「Ave Maria」（歌・ピアノ・ヴァイオリンによる三重奏）などを歌う。
また、かわさき市民第九合唱団、中央大学音楽研究会混声合唱団など、数々のアマチュア合唱団でドイツ語の発音指導に携わり、分かりやすく実践的な指導を行なってきた。
昨年11月5日、「名古屋オルガンの秋」に初出演。吉田 文氏の伴奏と共にトーマス・マイヤー＝フィービッヒ作曲　ソプラノとオルガンの為の「宗教的小協奏曲 Benedicam Dominum　主をたたえ」 を初演。

**吉田　文**
**Aya Yoshida**

ドイツ・ケルン音楽舞踊大学カトリック教会音楽科、並びにパイプオルガン科卒業。
A級教会音楽家ドイツ国家資格及びドイツ国家演奏家資格Konzertexamen取得。
パーダーボルン大聖堂オルガニスト常時代理、聖カタリーナ教会オルガニスト、ケルン南部司牧地区教会音楽家等を歴任。
「名古屋オルガンの秋」主宰。日本オルガニスト協会会員。名古屋女子大学准教授を経て、現在は名古屋音楽大学、南山大学非常勤講師、南山エクステンションカレッジ朝日カルチャーセンター講師。
平成27年度名古屋市民芸術祭特別賞受賞
令和3年度名古屋市芸術奨励賞受賞。



**トーマス・マイヤー＝フィービッヒ**
**Thomas Meyer-Fiebig**

ドイツ・デトモルト音楽大学作曲科、同大学院作曲課程科卒業。
1978年来日以来、国立音楽大学及び大学院にて作曲科の教授として後進の指導にあたる一方、ドイツ 各地の大学にても特別講義講師としてたびたび招聘されている。 2015年退官、国立音楽大学名誉教授。作曲家としての活動の傍ら オルガニストとしても活発な演奏活動を続けており、ドイツのエルツ山脈地方ナッサウのジルバーマン製作の歴史的オルガンにてCDを収録した。
2015年国立音楽大学退退官、国立音楽大学名誉教授。
「名古屋オルガンの秋」実行委員。
令和元年度名古屋市民芸術祭特別賞受賞。

**名古屋グレゴリオ聖歌を歌う会**
**（12月1日）**

死者を記念する月である11月にグレゴリオ聖歌で死者の為のラテン語ミサを捧げる伝統を戦後より培った「カトリック東山教会グレゴリオ聖歌を歌う会」と、南山大学エクステンションカレッジ講座「グレゴリオ聖歌を歌いましょう」のメンバーを中心として発足したグループ（指揮　吉田文）。
2013年名古屋オルガンの秋でのコンサート「グレゴリオ聖歌とパイプオルガン」以来、オルガンコンサート・クリスマスコンサート・死者のミサ演奏会等に度々出演している。
祈りの音楽であるグレゴリオ聖歌の心を探求し、体現する ことを目的として研鑽を積み重ねている。